

アフリカの人々と名付け 16

老女のキリスト名の意味するもの ——

自称と「吾称」、他称と「彼称」

小馬 徹

前回、ある人物の姿形・容貌・器量・癖・振る舞いなどに因んで付けられた実名以外の名前を、渾名と定義した。その上で、ナイル語系の牧畜民は「詩名」や「牛名」という自己の矜持を示す名前をもつが、渾名だけは事情が異なり、肯定的な内容をもつ渾名がほとんど存在しないと述べた。「ほとんど」と断らざるを得ない事情には、「自称」と「他称」の捉え方が大きく関わっている。

自称と「吾称」、他称と「彼称」

『坊ちゃん』の作者にとっては、漱石も金之助も普通の意味では、つまり自分が自分自身を指す時に用いる名前であるという意味では、自称である。しかし、金之助は親から与えられた名前だから、自分で自分を名付けた「自称」ではなく、この意味では「他称」である。即ち、日本人の通常の戸籍上の名前は、他称が自称化したものだと言えるだろう。他方、漱石というペンネームは、自ら名乗ったものだという意味で「自称」であり、しかも『坊ちゃん』の作者が自分自身を指す時に用いたという意味でも自称である。

混乱を避けるために、今仮に、自分自身を呼ぶ名前を自称、その内で自分が自ら付けた名前を「吾称」と記して区別しよう。また、他人を〔が〕呼ぶ名前を他称、他人に〔が〕命名した名前を「彼称」と記そう。

「吾称」としての渾名とペンネーム

すると、日本では——子どもは別にして——渾名は「彼称」であり、且つ他称である。つ

まり、アカシャツとかヤマアラシとか名付けたのは坊ちゃんであって、彼の同僚教員が自らそう名乗ったのではない。また、坊ちゃんがアカシャツとかヤマアラシと呼ぶのであって、彼らは決して自分たちをそうは呼ばない。

ところが、アフリカでは自分自身を渾名で、いわばアカシャツとかヤマアラシと呼ぶのは普通のことである。それどころか、自分自身にアカシャツとかヤマアラシのごとき渾名を付ける人も往々見られる。この場合には、渾名は「吾称」であるが、また自称であると共に他称でもある事が分かるだろう。

すると、この種の渾名は、『坊ちゃん』の作者にとっての漱石という名前と似た事情を持っている事に気付く。作家のペンネームがそうであると同様、この種の渾名にも、何か独自の自己主張があると言えるだろう。

「足悪ソイ」

そこで、キプシギスの「吾称」としての渾名を取り上げる。事例は多くないが、特に強く印象に残ったものに、「足悪ソイ」と「稗クタサズ將軍」がある。これらの名前の持ち主たちは、ケニア、ボメット県の或る小さな商業センター近村に住む中年男性だった。

ソイは小柄で生まれつき足が不自由だったが、父称であるソイにその事実を冠した「足悪ソイ」を吾称するようになり、やがて「足悪」が彼を指す渾名になった。彼には鬱屈した陰が少しもなかった。家は貧しい方だが、成女式（加入礼）を迎える娘たちに手作りの衣装や頭飾りを律儀に送っては歓心を買ひ、

幾人もの恋人と妻に恵まれた。

「足悪ソイ」は、キプシギスの標準的な渾名とそっくり同じ機制をもつ。それは、弱点をさらけ出して笑いを呼び込み、自他ともにその事実を笑い飛ばそうというものである。ソイの事例の何よりの特徴は、弱者が主体的に渾名の機制を発動させた点にある。しかも、足悪をキプシギス語ではなく東アフリカの共通語であるスワヒリ語にしたのは、マーケットに住む少数の異民族の人々も巻き込んでそれを実現しようとしたからであろう。

「稗クタサズ将軍」

一方、「稗クタサズ将軍」は矜持を示す渾名である。彼は平均以上の農地を持つが、妻が病弱で、農作業の人手に事欠くことが少なくなかった。ある年、稗が熟した頃に妻が病を得、しかも雨季が間近に迫っていた。雨にあえば、稗は駄目になる。こんな場合、村人に短い手紙を送って無償の援助を求めるのが、「保護」と呼ばれる相互扶助の伝統である。ところが、彼は人手を借りずに、たった一人で稗の穂刈りをやり遂げてしまった。

数十年前までは、手紙ではなく駝鳥の羽一本を村人に届けた。すると、一団の少年少女が戦いの角笛を吹き鳴らしつつやって来て、瞬く間に穂刈りを終えたのである。ただ、この間、家人は決して彼らに姿を見せてはなかった。「保護」の原意は、マサイとキプシギスの戦いで、駝鳥の羽を差し出して助命嘆願する敵を許す慣行である。ある村人の収穫を確保するための援助も、それに準えられて「保護」と呼ばれた。「稗クタサズ将軍」とは、これを逆手にとって自分を戦いの勝者に見立て、自ら誇ろうとする命名である。

「足悪ソイ」も「稗クタサズ将軍」も、共に飄忽な好人物だった。だが、数年前に後者が急死し、人生の明暗ははっきりと分かれた。自らを誇れば、必ず、何か大きな力の脅威に曝されるものだと言った。

クリスチャン・ネームを名乗る老女

現代のキプシギスでは「吾称」が生まれる可能性は、渾名以外にはまずない。例外は、老女が「キリスト教名」を名乗る場合である。

キリスト教徒である老女は、キリスト教徒の家に生まれたか、若い頃に改宗したのであって、老女がキリスト教名を名乗り始めるのは、多くは改宗のゆえではない。それは、彼女が女性自助組合に参加する時だ。知り合いの老女がある日突然エリザベスを名乗った時には、亡き祖母がマリアかダイアナとでも名乗ったかのごとき衝撃を覚えたものだった。

エリザベスは、「稗クタサズ将軍」のように創作されたものではなく、出来合いの名前から選択された「吾称」である。しかし、「吾称」の概念によって明らかにされる事柄は重要である。女性自助組合は、キプシギスの伝統的な村の互助的な労働交換の枠組みの外で組織されるボランタリーな運動だ。それは、僅かな基金を出し合って農地を借り上げ、協働耕作を通じて生活改善を図りつつ、女性の自立を目指している。しかも、ケニア政府の指導と援助の下に全国的に展開されている事業であり、伝統的な男性優位の政治構造に対立する力を持っている。

老女は遅まきながら、ごく限られた範囲であれ、伝統社会の男性的支配原理からの自立を試みようとしているのだ。彼女の名乗るキリスト教名は既成のものであり、それゆえ今や全ての子どもたちがキリスト教名を名乗るのと同じ現象に見えるかも知れない。しかし、老女の場合、「吾称」である事実と名乗りのタイミングの意味を見逃してはならない。

ただ、彼女の「吾称」は、「稗クタサズ将軍」のように声高に自己主張するものではなく、その名の指し示す内容とその内実である彼女との齟齬を自らも笑いつつ祝福されるべきものなのだ。それは、足悪という既成の範疇を「吾称」としたソイの趣意に似ている。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)